九條遺跡発掘調査報告

2009（平成21）年１月

三重県埋蔵文化財センター

序

台高山脈に端を発し、伊勢湾に注ぐ一級河川櫛田川沿いには、上流域から下流域に至るまで様々な時代の貴重な遺跡の存在が知られております。それは九條遺跡が所在する多気町においても例外ではありません。これまでにも多気町内では、主に開発事業に伴って多くの遺跡発掘調査が行われ、当地の歴史を解明する考古資料が蓄積されています。

埋蔵文化財の保護が重要なことは言うまでもありませんが、私たちの生活改善に欠くことのできない公共事業も停滞させてはなりません。当埋蔵文化財センターでは、これらの事業のため、関係機関と充分協議の上で、現状保存が困難な遺跡については発掘調査を実施しております。そして、消滅する遺構等を記録保存し、発掘調査報告書として刊行しております。

今回の調査の結果、当地を特徴付ける地割に関係する溝がみつかり、歴史解明の貴重な資料を確認しました。この成果をまとめた本報告が、文化財保護へのご理解を深めていただくきっかけになれば幸いと存じます。

末筆となりましたが、発掘調査にあたりご協力をいただきました、関係機関と地元の皆様に厚くお礼申し上げます。

平成21年１月

三重県埋蔵文化財センター
所 長　吉 水 康 夫

例　　言

1．本書は、三重県多気郡多気町三疋田（さんびきだ）字九條（くじょう）に所在する九條遺跡（くじょういせき）の発掘調査告書である。

2．発掘調査は当初、多気町大字三疋田地内に所在する三疋田遺跡の第２次調査として行ったが、整理段階で遺跡名を九條遺跡に改めた。

3．発掘調査は、平成19年度農免農道整備事業(松阪多気地区)に伴うもので、本調査の調査面積は145.82㎡、期間は平成19年６月20日より平成19年７月６日までである。

4．発掘調査は、以下の体制で行った。

調査主体　　三重県教育委員会

調査担当　　三重県埋蔵文化財センター

調査研究Ｉ課　　技師 萩原義彦・臨時技術補助員 山本達也

発掘作業　　有限会社サンショー

5．本書の執筆及び遺構の撮影は萩原・山本が行い、遺物の撮影は山本が担当した。なお、文責は目次と本文末に表記した。

6．発掘調査等の経費は三重県農水商工部が負担した。

7．本書で報告した記録類・出土遺物は、三重県埋蔵文化財センターで保管している。

本文目次

Ⅰ　前言 …… （山本） …… 1
　1　調査に至る経過 …… 1
　2　調査の経過 …… 1
　3　調査の記録と方法 …… 1
　4　文化財保護法等にかかる諸通知 …… 1
Ⅱ　位置と歴史的環境 …… （山本） …… 2
　1　地理的環境 …… 2
　2　歴史的環境 …… 2
Ⅲ　遺構と遺物 …… （山本） …… 7
　1　調査区の基本層序 …… 7
　2　遺構 …… 8
　3　遺物 …… 9
Ⅳ　結語 …… （萩原・山本） …… 10
　1　遺跡範囲について …… 10
　2　ＳＤ３の位置付けについて …… 10
　3　耕作溝の方位と周辺の地割について …… 11

挿図目次

第１図　遺跡位置図 …… 3
第２図　調査区周辺地形図 …… 3
第３図　事業地内調査区位置図 …… 4
第４図　本調査区及び範囲確認調査坑位置図 …… 4
第５図　調査区平面図・土層断面図 …… 7
第６図　下層確認トレンチ位置図・土層断面図 …… 8
第７図　出土遺物実測図 …… 9
第８図　九條遺跡・三疋田遺跡範囲図 …… 10
第９図　九條遺跡周辺検出遺構方位図 …… 11

表目次

第１表　範囲確認調査坑一覧表 …… 5
第２表　遺構一覧表 …… 7
第３表　遺物観察表 …… 9

写真図版目次

写真図版１　上：調査前状況（北から）、下：調査前状況（南から） …… 13
写真図版２　上：調査区完掘状況（北から）、下：ＳＤ１・４・５完掘状況（南から） …… 14
写真図版３　上：ＳＤ２完掘状況（北から）、下：調査風景（南から） …… 15
写真図版４　上：出土遺物、下：調査区工事後状況（北から） …… 16

凡　　例

（地図類）

1．本書で使用した地図類は、国土地理院発行の1/25,000地形図（世界測地系に準拠）及び多気町都市計画図（日本測地系に準拠）である。

2．本書の挿図で示す方位は全て座標北で示し、座標は世界測地系を用いた。なお、磁北は西偏約6°30′（平成12年　国土地理院）である。

（遺構類）

1．土層図の色調は、小山正忠・竹原秀雄編著『新版　標準土色帖』（日本色研事業株式会社　1967年初版　1999年第21版）に準拠した。

2．土層図における土色番号は上・下層で連番となっている。

3．本書での遺構番号は連番となっている。
遺構の性格については、以下の遺構表示略記号を用いて表示した。
SD：溝

（遺物類）

1．本書での遺物実測図は、全て実物の1/4としている。

2．遺物実測図は、全体として連番となっている。

3．遺物観察表は以下の要領で記載している。

報告番号……挿図掲載番号である。
実測番号……実測段階の登録番号である。
質……土師器・須恵器といった分類を示す。
器種……遺物の器種を示す。
調査種別……遺物の出土した調査の種別である。
調査坑No.……遺物の出土した調査坑の、調査時における番号を示した。
遺構・層位等……遺物の出土した遺構や層位名を記した。
計測値（cm）……遺物の計測値を示す。口径は口縁部径、底径は底部径、器高は遺物の高さを示す。なお、数値はそれぞれの部位の最大径である。
調整・技法の特徴……主な特徴を示した。
胎土……小石等の混和材を除いた素地の緻密さを「密～粗」で示した。
色調……その遺物の代表となる色調を記載した。表記は前掲『新版標準土色帖』による。
残存度……記載した部位を12分割した際の残存度を示した。

Ⅰ　前　　言

1　調査に至る経過

九條遺跡は、櫛田川右岸に展開する河岸段丘に立地する遺跡である。当埋蔵文化財センターでは、平成17年度に本遺跡東方の三疋田遺跡周辺で、道路改築事業（一）勢和兄国松阪線に伴い、3,000㎡を対象に範囲確認調査を行った。同18年度にも6,800㎡を対象に範囲確認調査を行ない、調査地東方300m地点で1,200㎡の三疋田遺跡本調査を行った。

また、18年度に農免農道整備事業（松阪多気地区）の敷設工事に伴って2,000㎡を、工事に先行する側溝工事に際して、今回調査区の東側の220㎡を対象に範囲確認調査を行った。後者の調査では溝・ピット等の遺構や土師器・山茶椀等の遺物を検出した。その結果、道路敷設箇所145.82㎡について発掘調査が必要との判断に至り、本調査を行うこととなった。

現地調査段階では三疋田遺跡の第２次発掘調査として本調査を行った。しかし、調査の結果からは三疋田遺跡とは別遺跡とすべきであると判断した。そこで小字名を元に調査地を「九條遺跡」と命名し、新発見の遺跡として扱うこととした（Ⅳ結語参照）。

2　調査の経過

発掘調査の現地作業は、平成19年６月20日より７月６日まで実施した。調査の結果、ピット・道路側溝・耕作溝を検出した。遺物は、奈良時代の土師器・須恵器が出土した。本調査終了後の９月19日と11月28日には、調査地南方の農免農道敷設予定地内で、範囲確認調査を行った。

調査日誌（抄）

６月20日（水）　現地確認
　　25日（月）　重機による表土除去開始
　　26日（火）　表土除去終了
　　27日（水）　遺構略測
　　28日（木）　人力による遺構掘削開始
　　29日（金）　遺構掘削・耕作溝掘削完了
７月３日（火）　ＳＤ２掘削完了。清掃後写真撮影
　　４日（水）　遺構平面実測
　　５日（木）　座標振込・レベル測量・断面実測
　　６日（金）　下層確認トレンチ掘削・調査区引渡

3　調査の記録と方法について

a　掘削の方法について

掘削は、舗装・表土・下層確認トレンチを重機によって掘削し、遺構を人力で掘削した。

b　調査区の設定について

調査区は、任意の４m方眼のグリッドを設定の上、西から数字、北からアルファベットを附した。

c　遺構図面について

遺構の平面については1/100縮尺で平板実測を行った。同時に、三辺測量によって国土座標中における調査区の位置を求めた。土層断面については1/20縮尺で手描きによる実測を行っている。

d　写真撮影について

遺構の写真撮影は、4×5インチ判カメラを用い、全景写真は高所作業車上から撮影した。補助として35㎜カメラを併用した。フィルムは、モノクロネガフィルム及びカラーリバーサルフィルムを使用した。

遺物の写真撮影は、ブローニー判モノクロネガフィルムを使用した。

4　文化財保護法等にかかる諸通知

文化財保護法（以下、法）等にかかる諸通知は、以下により行っている。

・法に基づく三重県文化財保護条例第48条第１項（県教育長宛）
平成19年４月12日付け松農環第4－7号
・法第99条（県教育長宛）
平成19年６月25日付け教埋第124号
・遺失物法による文化財発見・届出通知（松阪警察署長宛）
平成19年７月26日付け教委第12－4－1号

（山本達也）

Ⅱ　位置と歴史的環境

1　地理的環境

九條遺跡（１）は三重県中部の多気町大字三疋田字九條に所在する。三疋田地区は一級河川櫛田川の河口から約16㎞遡った中流域の右岸にあり、河岸段丘上に立地する。

当地区の南方には標高291mの城山がある。ここから、緩やかに湾曲する形で東方へと丘陵地帯が延びている。三疋田遺跡のある平地は南側をこの丘陵地に囲まれ、北側を櫛田川に画された、東西約４㎞、南北約１㎞の三日月状の形を呈している。丘陵と平地の境界付近の谷地は、多くがせき止められて用水地となっている。

本遺跡はこの平地の西端近く、城山から流出した土砂によって形成された緩やかな扇状地上に立地する。今回の調査地は、周知の遺跡である三疋田遺跡（２）の遺跡範囲から西方へ約250mの地点にあたる。

2　歴史的環境

多気町内で旧石器時代の遺物が出土した遺跡は約20ヶ所知られている。本遺跡周辺ではナイフ形石器が確認された上世古遺跡（３）、平林遺跡（４）、三川遺跡（５）①などがある他、上村池Ｂ遺跡では細石刃が、河田古墳群内の東谷Ｃ遺跡では男女倉型尖頭器がある②。町内では他にも尖頭器が出土した遺跡が複数ある。櫛田川左岸では、松阪市中万町の上寺遺跡（６）でナイフ型石器がある③。

縄文時代の遺跡としては、本遺跡の近傍では椿垣内遺跡（７）、大陽園遺跡（８）、北垣内遺跡（９）、西大垣内遺跡(10)等がある。スクレーパー、フレイク、石鏃、石錘などが出土しているが、いずれも詳細な時期は不明である。

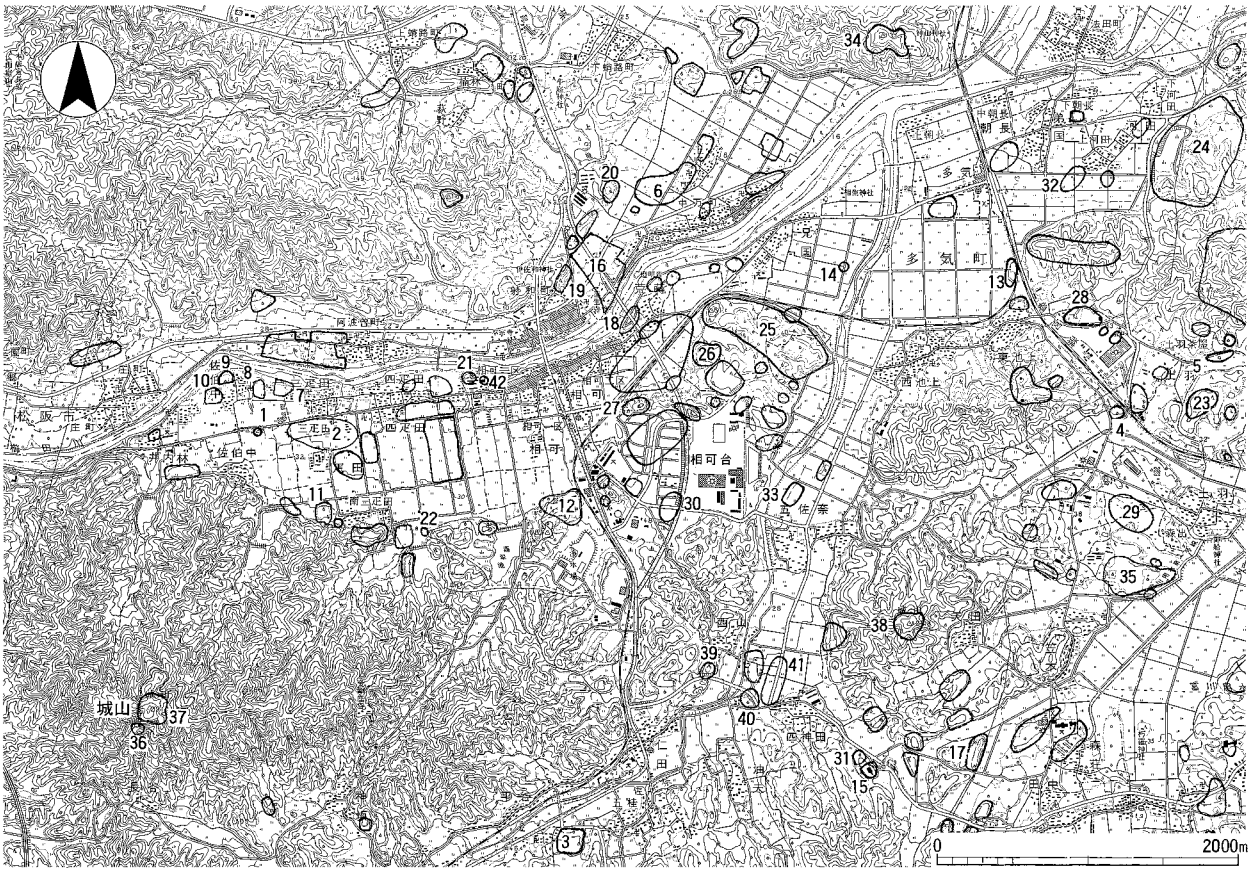
さらに視野を広げて時期の分かる遺跡を求めると、まず本遺跡南東にあり、平成７年度の発掘調査で草創期の石器群や押型文土器が出土した高皿遺跡(11)④が挙げられる。他の当該期の遺跡としては、昭和38、39年の発掘調査で尖頭器・石斧、押型文土器が出土した牟山遺跡(12)⑤がある。早期の遺跡としては坂倉遺跡(13)があり、発掘調査では住居や炉跡が検出されている⑥。他に上タコリ遺跡(14)、フケ遺跡(15)などでは神子柴型石斧が採取されている⑦。また、鴻ノ木遺跡(16)下層⑧では遺構や押型文土器が出土している。

前期の遺跡は、本遺跡付近では勢和村のアカリ遺跡、宮川流域では下久具万野遺跡があるが、全体として遺跡数は多くない。中期の遺跡は、ナゴサ遺跡(17)⑨、西ノ谷遺跡などがある。後期には新徳寺遺跡(18)⑩、松阪市王子広遺跡等、中期よりもさらに多く、安定した集落が営まれるようになる。晩期の遺跡数は少なく、本遺跡周辺では下宮前Ａ遺跡(19)⑪、鴻ノ木遺跡(16)の上層⑫などがある。他に櫛田川流域では、近年発掘調査が行われ、多数の土器棺墓・土坑墓が検出された大原堀遺跡が注目される存在である⑬。宮川流域まで目を向けると、度会町の森添遺跡が後期から続く著名な遺跡として挙げられる。

弥生時代の遺跡で前期の遺物が出土したものは、櫛田川左岸にある鐘突遺跡(20)と上寺遺跡（６）が挙げられる⑭。中期の遺跡としては花ノ木遺跡がある。後期の遺跡は、相可高校校庭遺跡(21)で弥生土器や古墳時代の土師器が出土している⑮。この他に四疋田集落南方の丘陵端部で昭和19年に銅鐸が出土したが(22)、銅鐸自体は所在不明となっている⑯。

古墳時代には、当地周辺でも数多くの古墳が築かれた。前期古墳の存在は明らかではないが、中期古墳としては埴輪や石製壺が出土した権現山２号墳(23)が知られる。他に、いずれも帆立貝式古墳である、明和町の神前山１号墳、大塚１号墳、高塚１号墳などの有力な首長墓が築かれる。後期には数多くの群集墳が築かれ、弟国周辺では約100基からなる河田古墳群(24)の他、その東方には上村池古墳群、斎宮池古墳群が分布する。相可周辺では黒田山古墳群(25)、宮ノ谷古墳群(26)、立岡山古墳群(27)などが知られる。そして、女山古墳群(28)や森出７号墳(29)などが築かれた７世紀中頃を最後に古墳は築かれなくなる⑰。

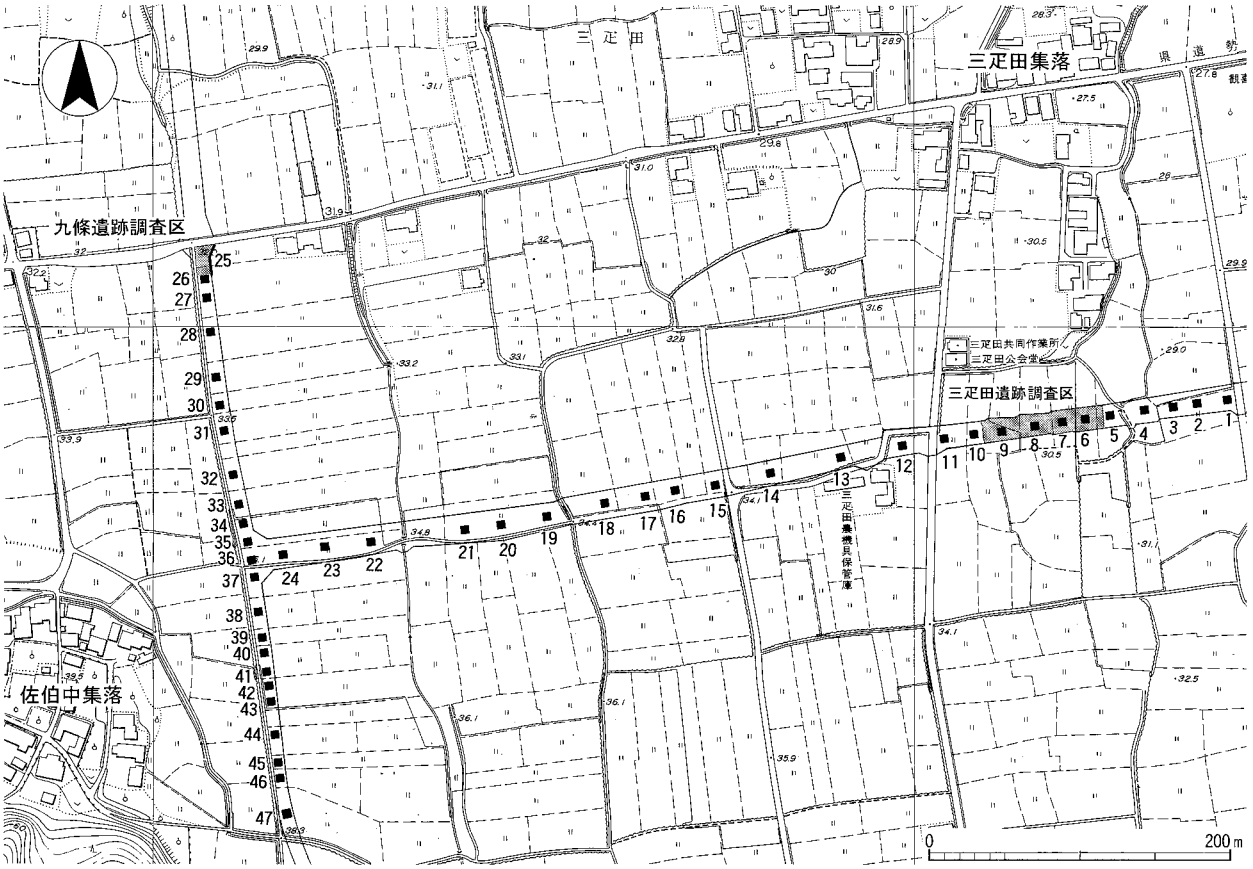
古墳以外の特徴的な遺跡としては明気窯跡(30)や



第１図　遺跡位置図（1:50,000）　（国土地理院『松阪』・『国東山』　1:25,000より）

第２図　調査区周辺地形図（1:5,000）

第３図　事業地内調査区位置図（1:2,000）



第４図　本調査区及び範囲確認調査坑位置図（1:5,000）

中尾窯跡などの窯跡があり、当地でも須恵器生産が行われていたことが知られる⑱。他に、三疋田遺跡(2)では発掘調査で、器台など古墳時代の須恵器が出土しており⑲、四疋田狐谷では、現存はしないが、古墳から須恵器が出土している⑳。

奈良・平安時代に入ると各地で寺院が建立されるようになり、本遺跡の近傍でも四神田廃寺(31)や、創建が白鳳期に遡ると考えられる御麻生薗廃寺が知られている。この御麻生薗廃寺に瓦を供給したと考えられているのが牧瓦窯跡群である㉑。この他にカウジデン遺跡(32)では土馬、斎串といった祭祀遺物や墨書のある土器が出土している㉒。五佐奈遺跡(33)ではこうした祭祀遺物に加え、緑釉風字硯や「中臣」と墨書された土器なども出土しており、荘園経営に関わる施設の存在が考えられている㉓。三疋田遺跡の発掘調査の際には、建物跡には伴わないが、平安時代のものと考えられる瓦が多数出土しており、調査区付近に、寺院などの瓦を使用した建物があったことが想定されている㉔。

また、当地を語る上で欠かせないのが条里の存在である。遺跡名ともなっている「三疋田」や、この東方の「四疋田」という地名は条里制に関わるもの

番号	調査日時	調査坑番号	遺物包含層上面の深さ(cm)	遺構上面の深さ(cm)	遺構	遺物	備考
1	平成17年11月24日	1	―	―	―	―	
2	平成17年11月24日	2	―	―	―	―	
3	平成17年11月24日	3	―	―	―	土師器片	
4	平成17年11月24日	4	60	―	―	―	
5	平成17年11月24日	5	―	―	―	―	
6	平成17年11月24日	6	―	80	流路	木片	土器は無し　三疋田遺跡調査区内
7	平成17年11月24日	7	―	110	流路	杭・板材・種子	土器は無し　三疋田遺跡調査区内
8	平成17年11月24日	8	―	90	流路	―	三疋田遺跡調査区内
9	平成17年11月24日	9	75	90	土坑	土師器杯・須恵器	三疋田遺跡調査区内
10	平成17年11月24日	10	―	―	―	―	
11	平成17年11月24日	11	―	―	―	―	
12	平成18年04月18日	1	―	―	―	―	
13	平成18年04月18日	2	―	―	―	土師器片	範囲確認調査坑付近表採遺物あり
14	平成18年04月18日	3	―	―	―	―	
15	平成18年04月18日	4	―	―	―	―	
16	平成18年04月18日	5	―	―	―	―	
17	平成18年04月18日	6	―	―	―	―	
18	平成18年04月18日	7	―	―	―	―	
19	平成18年04月18日	8	―	―	―	土師器片	
20	平成18年04月18日	9	―	―	―	―	
21	平成18年04月18日	10	―	―	―	―	
22	平成18年04月18日	11	―	―	―	―	
23	平成18年04月18日	12	―	―	―	―	
24	平成18年04月18日	13	―	―	―	―	
25	平成18年09月13日	―	―	10～20	溝・ピット	土師器・山茶椀片	九條遺跡調査区隣接地
26	平成18年01月12日	10	―	―	―	―	
27	平成18年01月12日	9	―	―	―	土師器・陶器片	
28	平成19年09月19日	1	―	―	―	―	
29	平成19年09月19日	2	―	―	―	―	
30	平成19年09月19日	3	―	―	―	山茶椀片	
31	平成19年09月19日	4	―	―	―	土師器片	
32	平成18年01月12日	8	―	―	―	―	
33	平成18年01月12日	7	―	―	―	―	
34	平成18年01月12日	11	―	―	―	陶器片	
35	平成18年01月12日	6	―	―	―	土師器・陶器片	
36	平成18年01月12日	5	―	―	―	土師器・陶器片	
37	平成19年09月19日	5	―	―	―	土師器片	
38	平成19年09月19日	6	―	―	―	土師器片	
39	平成19年09月19日	7	―	―	―	山茶椀片	
40	平成18年01月12日	4	―	―	―	土師器片	
41	平成18年01月12日	2	―	―	―	土師器・陶器片	
42	平成18年01月12日	3	―	―	―	―	
43	平成19年09月19日	8	―	―	―	―	
44	平成19年09月19日	9	―	―	―	土師器・山茶椀片	
45	平成18年01月12日	1	―	―	―	山茶椀片	
46	平成19年09月19日	10	―	―	―	―	
47	平成19年11月28日	―	―	―	―	―	

第１表　範囲確認調査坑一覧表

であるが、現在もこの周囲に条里型地割が見られ、史料面からの詳細な検討もなされている㉕。

中世の遺跡としては、本遺跡の北東に望見される丘陵上に南北朝時代に南朝側の拠点となった神山城(34)があり、台状地や堀切が残る㉖。東方約５kmの外城田川に面した丘陵上には、国司家一族の阪内氏が城主であったと考えられる笠木館(35)がある㉗。規模は東西約500m、南北約400mで、土塁や堀で区画された郭が連続する構造を持つ。本遺跡南方の近長谷寺(36)背後の山上には、正平４（1349）年に築城、外宮神官度会家行が城主とされる近津長谷城(37)がある他に多気町矢田地区の矢田城(38)、西山城(39)、同じく四神田地区の片倉氏館(40)等多数の中世城館が確認されている㉘。

発掘調査が行われた遺跡のうち、中世の集落跡と考えられるものには、神山城の北東から東方に位置する山添遺跡㉙、鴻ノ木遺跡(16)（上層）があり㉚、いずれも鎌倉・室町時代の土師器鍋・羽釜・皿や陶器が出土している。この他にはミゾコ遺跡(41)の調査事例があり、土師器・山茶椀や各種陶磁器が出土している㉛。櫛田川に面した河岸段丘際に立地する相可出張遺跡(42)では、掘立柱建物や大溝が検出され、土師器、山茶椀、各種陶器に加え、南勢地域では比較的確認事例が少ない瓦器が出土している㉜。瓦器は三疋田遺跡の発掘調査で１点、上ノ垣外遺跡や巣護遺跡でも数片の出土例がある㉝。これら以外にも中世の遺物が採取されている遺跡は多く、今回の調査区周辺でも山茶椀や、中世後期のものと見られる土師器皿片の散布を認めた。既に指摘されているように㉞、現集落と重なるような場所で中世集落も営まれていたのであろう。　（山本達也）

【註】

①多気町「第２編 原始」『多気町史 通史』（多気町史編纂委員会）　1992

②多気町教育委員会『河田古墳群発掘調査報告Ⅳ』　1983

③松阪市教育委員会『上寺遺跡発掘調査報告書』　1981

④三重県埋蔵文化財センター『高皿遺跡発掘調査概報』　1996

⑤註①に同じ

⑥註①に同じ

⑦註①に同じ

⑧三重県埋蔵文化財センター「鴻ノ木遺跡（上層編）・（下層編）」『一般国道42号松阪・多気バイパス建設地内埋蔵文化財発掘調査報告Ⅳ』　1998

⑨註①に同じ

⑩三重県埋蔵文化財センター『一般国道42号松阪・多気バイパス建設地内埋蔵文化財発掘調査報告Ⅲ　新徳寺遺跡』　1997

⑪松阪市『松阪市史　第二巻　資料編　考古』　1978

⑫註⑧に同じ

⑬三重県埋蔵文化財センター『大原堀遺跡発掘調査報告－第２・３次調査－』　2008

⑭註①に同じ

⑮註①に同じ

⑯註①に同じ

⑰註①に同じ

⑱註①に同じ

⑲三重県埋蔵文化財センター『三疋田遺跡発掘調査報告』　2008

⑳註①に同じ

㉑三重県埋蔵文化財センター「牧瓦窯群」『近畿自動車道（久居～勢和）　埋蔵文化財発掘調査報告　１分冊２』　1989

㉒三重県教育委員会「カウジデン遺跡」『昭和54年度県営圃場整備事業地域埋蔵文化財発掘調査報告』　1984

㉓三重県教育委員会『三重県埋蔵文化財年報８』　1978

㉔註⑲に同じ

㉕星野利幸「神三郡の土地利用について」『斎宮歴史博物館研究紀要　16』斎宮歴史博物館　2007

㉖三重県教育委員会『三重の中世城館』　1977

㉗多気町「第３編　古代・中世」『多気町史　通史』　1992

㉘註㉕に同じ

㉙三重県埋蔵文化財センター『山添遺跡（第２次）・里中遺跡ほか』　1997

㉚註⑧に同じ

㉛三重県教育委員会『ミゾコ遺跡発掘調査報告』　1985

㉜三重県埋蔵文化財センター『相可出張遺跡発掘調査報告』　1996

㉝三重県埋蔵文化財センター『一般国道42号松阪・多気バイパス建設地内埋蔵文化財発掘調査報告Ⅱ　上ノ垣外遺跡』　1996

㉞註⑩に同じ

Ⅲ　遺構と遺物

1　調査区の基本層序

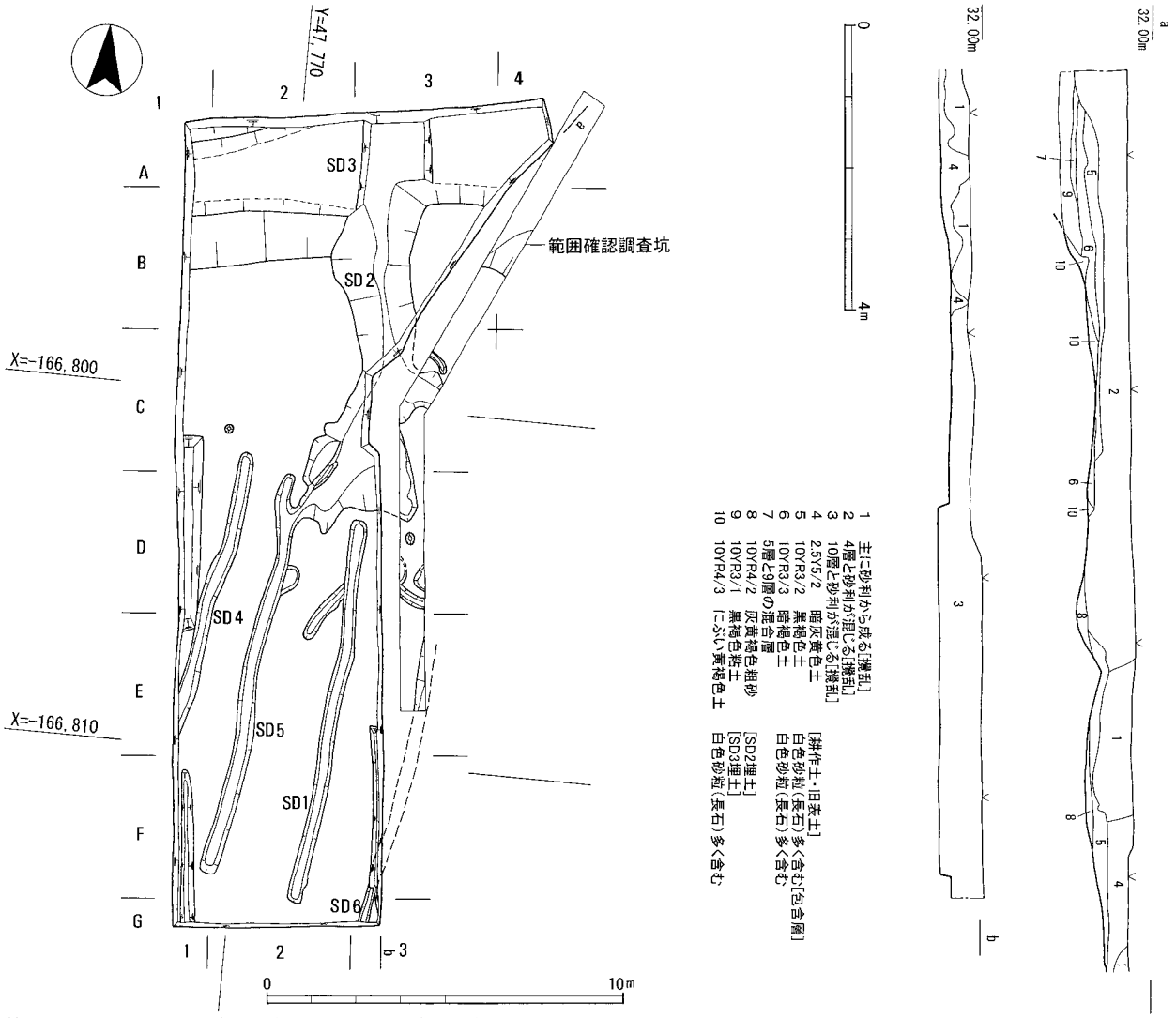
今回の調査区の基本層序は３層より成る。第Ⅰ層は暗灰黄色(2.5Y5/2)の旧耕作土、第Ⅱ層は黒褐色(10YR3/2)の遺構埋土、第Ⅲ層はにぶい黄褐色土(10YR4/3)である。遺構検出は第Ⅲ層の上面で行った。

また、遺構の記録後に下層確認を実施した。その結果、第Ⅲ層下には概ね標高30.3mから30.8mのレベルで黒色ないし黒褐色粘土の、ほぼ水平な堆積が認められた。この堆積層下は黄灰色ないし緑灰色のシルトもしくは砂層となる。これより下層、概ね標高29.8m以下ではこの砂層に人頭大の円礫が多量に混入する土層となっていた。

以上のことと周囲の地形から当地は本来、櫛田川の川原であったと見られる。そして、その後の一時期は、沼か湿地のような環境であったと考えられる。

遺構番号	性格	時代	グリッド	長さ	幅	深さ	主な出土遺物	備考
SD1	耕作溝	不明	D2・3、E2、F2	10.85m	0.4m	0.14～0.18m	土器小片	
SD2	流路か	奈良	B2・3、C2・3、D2・3	10.1m	1.7～2.2m	0.2～0.6m	須恵器・土師器	調査区東側の範囲確認調査坑中央で検出の溝と一連か
SD3	道路側溝	不明	A1～4、B1～4	10.1m以上	2.4m以上	0.6m	－	
SD4	耕作溝	不明	C2、D2、E1・2	8.1m以上	0.4～0.5m	0.12～0.22m	－	
SD5	耕作溝	不明	D2、E2、F2	11.45m	0.3～0.5m	0.07～0.35m	－	
SD6	耕作溝	不明	F3、G3	1.05m以上	0.25m	0.1m	－	調査区東側の範囲確認調査坑南端で検出の溝と一連か

第２表　遺構一覧表



第５図　調査区平面図（1:200）・土層断面図（1:100）

2　遺構

ＳＤ１・４～６　ＳＤ１は調査区の南側、東壁寄りで検出した。最大幅0.4m、最深部0.2mで、断面形状は凵字状である。埋土は黒褐色（2.5Y3/1）土である。遺物は縄文土器と思われる土器細片が１点出土したのみで、時期は不明である。

ＳＤ４～６は幅・深さ・形状がＳＤ１と類似し、２～３ｍの間隔をおいてほぼ平行して存在する。遺物の出土はなく所属時期は不明であるが、後述するＳＤ２（奈良時代か）と埋土が酷似することから、これと同時期の可能性がある。なお、調査区の東隣で行った範囲確認調査の際、調査坑南端で溝の一端が検出されている。位置関係と溝の方位からすると、ＳＤ６と一連のものであることが考えられる。

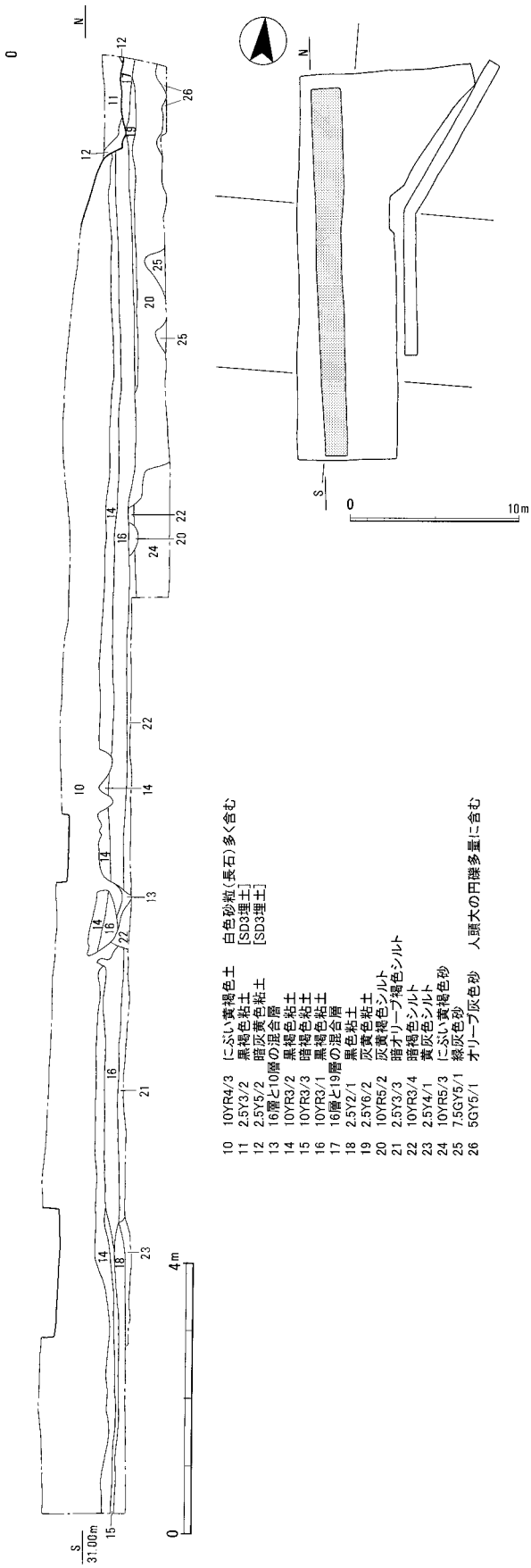
このようなあり方を示す素掘り溝群は、耕作に伴い形成されたものと考えられている①。従ってＳＤ１・ＳＤ４～６は、共に耕作溝とみられる。

ＳＤ２　調査区の東壁際で検出した。埋土は上層が黒褐色土（10YR3/2）、下層が灰黄褐色粗砂であった。遺物は、奈良時代の土師器・須恵器片が上層から出土した。規模は、全長10.1m、北半分での最大幅2.5m、最深部0.6mである。底面は北に向って傾斜しているが、フラットではなく、かなりの凹凸が見られる。調査区の東隣で行った範囲確認調査の際には、調査坑中央付近で溝の一端が検出されている。位置関係からすると、ＳＤ２はこれと一連のものであろう。そうした場合、中央部で逆「Ｙ」字状に分岐する平面形状になると考えられる。溝の南端はＳＤ５と接するが、切り合い関係は不明である。この遺構の性格としては、平面形状がいびつであり、底面の凹凸も大きいことなどから、自然流路の可能性が考えられる。

ＳＤ３　調査区の北壁際で検出した溝で、ＳＤ２に切られる。規模は幅2.4m以上、最深部0.6mであるが、道路際で側壁が崩壊する危険があったために完掘していない。出土遺物はなく、所属時期は不明である。　（山本達也）

【註】

①今尾文昭「『中世』素掘り小溝についての一解釈」『青陵』47　1981



第６図　下層確認トレンチ位置図（1:400）・土層断面図（1:100）

3　遺物

本調査出土遺物（１・２）　１・２は土師器甕である。いずれも斎宮編年①では第Ⅰ期第１段階（８世紀初頭）に相当する。

範囲確認調査出土遺物（３～12）　３・４は南伊勢系の土師器鍋で、４は伊藤編年②の第4段階ｄ形式（16世紀中葉）に相当する。

５は南伊勢系の羽釜で、南伊勢系土師器鍋の伊藤編年第３段階（14世紀中葉～15世紀中葉）に併行する。

６・７は同じく南伊勢系の土師器皿である。

８は土師器高杯の脚部である。斎宮編年では第Ⅰ期第３段階（８世紀中葉）に相当する。

９・10は山茶椀である。９は渥美産で、藤澤編年③の５ないし６型式（12世紀末～13世紀前葉）である。

11は折縁鉢である。登窯第４小期（17世紀中葉）頃のものと思われる④。12は常滑焼の甕口縁部で第10型式（15世紀後葉）のものである⑤。　（山本達也）

【註】

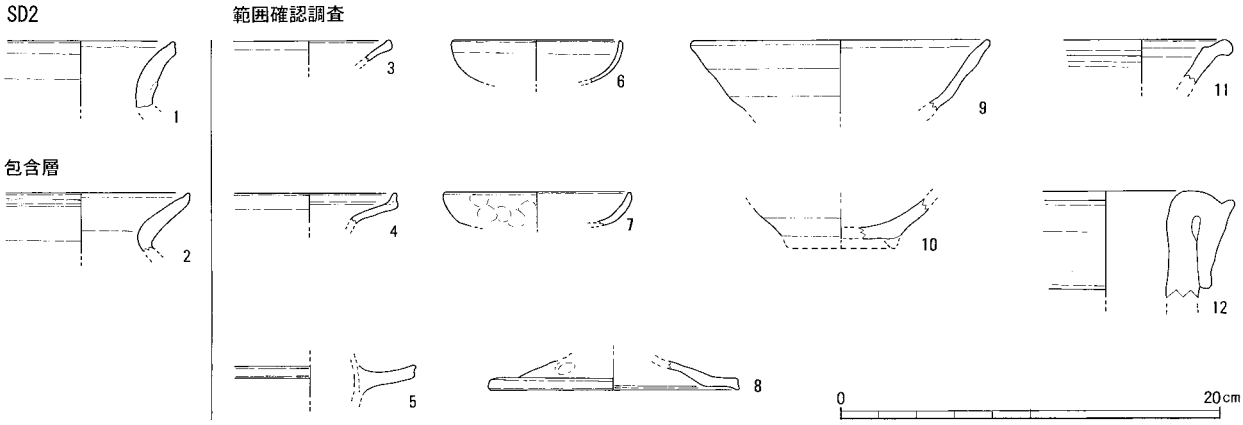
①斎宮歴史博物館『斎宮跡発掘調査報告Ⅰ　内院地区の調査　本文編』 2001

②伊藤裕偉「中世南伊勢系の土師器に関する一試論」『Ｍｉｅ　ｈｉｓｔｏｒｙ』vol.1　三重歴史文化研究会1990

③藤澤良祐「山茶碗研究の現状と課題」『研究紀要』第３号　三重県埋蔵文化財センター　1994

④藤澤良祐「瀬戸・美濃登窯製品の生産と流通」『江戸時代のやきものー生産と流通ー』記念講演会・シンポジウム資料集　財団法人瀬戸市文化振興財団埋蔵文化財センター編　2006

⑤中世土器研究会編『概説　中世の土器・陶磁器』真陽社　1995



第７図　出土遺物実測図（1:4）

報告番号	実測番号	質	器種	調査種別	調査坑No.	遺構・層位等	計測値(cm) 口径	底径	器高	調整・技法の特徴	胎土	色調	残存	備考
1	001-08	土師器	甕	本発掘調査	－	SD2	－	－	－	ヨコナデ	密	浅黄2.5Y7/3	口縁部1/12	
2	001-09	土師器	甕	本発掘調査	－	包含層	－	－	－	ヨコナデ	密	灰白10YR8/2	口縁部1/12	
3	001-02	土師器	鍋	範囲確認調査	調査坑No.40	－	－	－	－	ヨコナデ	密	灰白2.5Y8/2	口縁部1/12	南伊勢系
4	001-06	土師器	鍋	範囲確認調査	調査坑No.35	－	－	－	－	ヨコナデ	密	にぶい黄橙10YR7/3	口縁部1/12	南伊勢系　外面にスス付着
5	001-01	土師器	羽釜	範囲確認調査	調査坑No.40	－	－	－	－	ヨコナデ	密	灰白10YR8/2	鍔部1/12	南伊勢系
6	001-07	土師器	皿	範囲確認調査	調査坑No.35	－	9.0	－	－	オサエ・ヨコナデ	密	にぶい橙7.5YR7/4	口縁部2/12	南伊勢系
7	001-03	土師器	皿	範囲確認調査	調査坑No.40	－	10.0	－	－	オサエ・ヨコナデ	密	浅黄橙10YR8/4	口縁部2/12	南伊勢系
8	001-12	土師器	高杯	範囲確認調査	調査坑No.37	－	－	13.2	－	オサエ・ヨコナデ	密	外面：橙2.5YR6/6 内面：浅黄橙10YR8/3	底部2/12	
9	001-11	山茶椀	椀	範囲確認調査	調査坑No.39	－	15.8	－	－	ロクロナデ	密	灰白10Y7/1	口縁部4/12	渥美・湖西型
10	001-10	山茶椀	椀	範囲確認調査	調査坑No.30	－	－	6.2	－	ロクロナデ・底部糸切・貼付高台	密	灰白N8/	底部2/12	
11	001-05	陶器	鉢	範囲確認調査	調査坑No.35	－	－	－	－	ロクロナデ	密	釉色：灰白5Y7/1 素地：灰白2.5Y8/2	口縁部1/12	瀬戸美濃産
12	001-04	陶器	甕	範囲確認調査	調査坑No.36	－	－	－	－	ヨコナデ	密	表面：灰褐7.5YR4/2 断面：褐灰7.5YR4/1	口縁部1/12	常滑産

第３表　遺物観察表

Ⅳ　結　語

ここでは、発掘調査結果で判明した事柄を踏まえて若干の検討を行って考察をし、まとめとしたい。

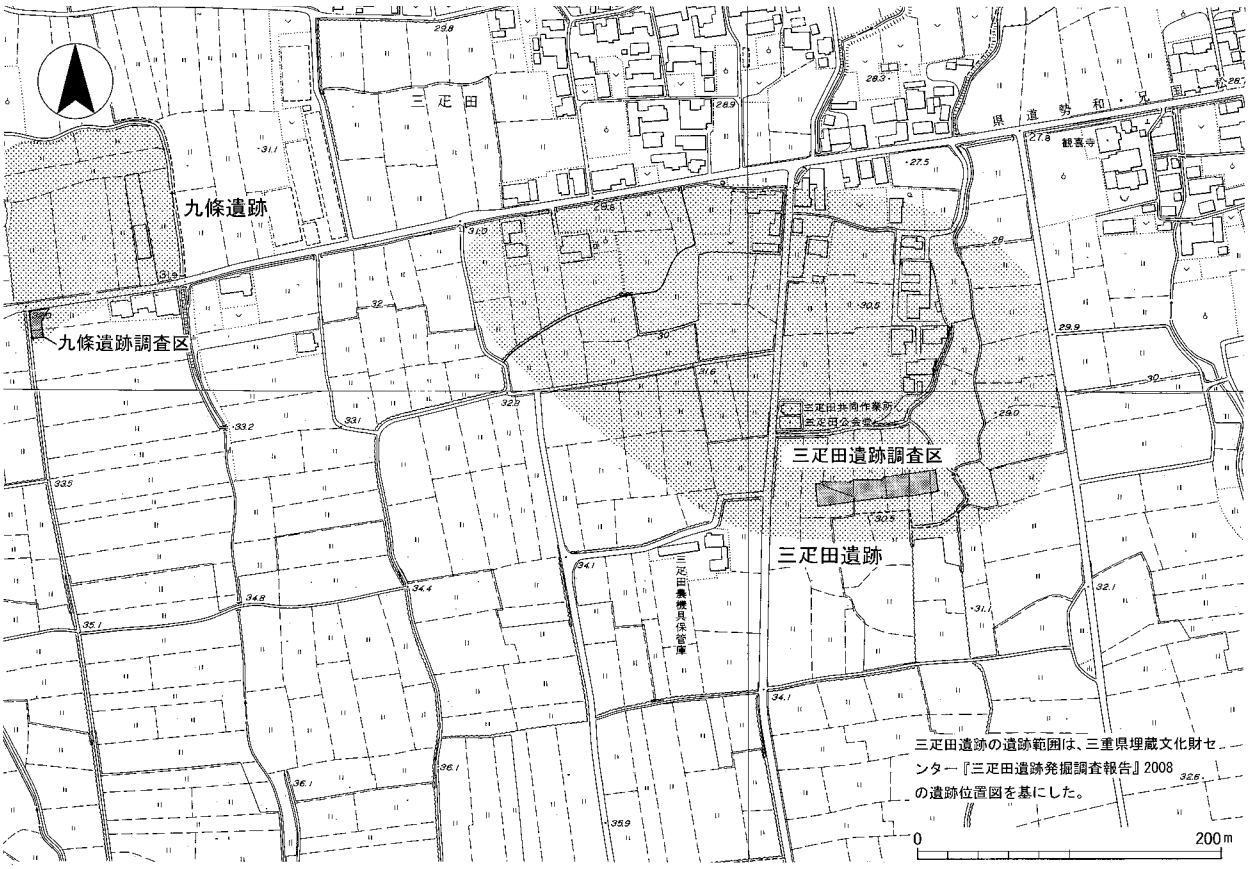
1　遺跡範囲について

今回は三疋田遺跡の西端付近ということで発掘調査を行った。しかし、範囲確認調査（第４図）では第1次調査区西側の調査坑No.10から、今回の調査原因となった農免農道に接するNo.24までの間では、遺構は全く検出されていない。このことから、遺跡範囲はこの間で断絶すると見るべきであり、調査地は三疋田遺跡の一部ではなく別個の遺跡と考える方が妥当である。さらに周辺の分布調査の結果、調査地の北約100mの水田で土師器片・山茶椀片の散布を認めた。この水田の北側は小川であり、遺跡範囲の北限はこの付近と思われる。さらに、西側と東側にも小川が流れていることから、遺跡範囲はこれらの小川で画された範囲より拡張はしないものと考えられる。以上の所見と、範囲確認調査・本調査の結果から、この新遺跡は、調査地の小字名より「九條遺跡」と命名したい。

また、農免農道関連の範囲確認調査を行った結果、図示し得た遺物は概ね範囲確認調査坑No.35～40の間で出土した（第４図・第１表参照）。しかし、遺物が出土した以外の調査坑を含めて見ても、遺構は一切確認されていない。よって、調査によって検出されたこれらの遺物は近域から運び込まれた可能性が高い。遺物が出土した調査坑の位置が佐伯中集落に最も近接した位置であることを考慮すれば、集落付近に現状では確認されていない遺跡が存在する可能性もある。今後、この付近で事業が行われる際は充分な注意を払う必要がある。

2　ＳＤ３の位置付けについて

星野利幸氏は、当地周辺における平安時代中期の土地利用についての史料である、『近長谷寺資材帳』を基に地理的状況の復元をされている①。同氏の復



第８図　九條遺跡・三疋田遺跡範囲図（1:5,000）

元案によれば、調査地北側の県道勢和・兄国・松阪線と同じ位置に、東西方向に通じる「卯酉大道」が位置すると推定されている。このことから、ＳＤ３は、卯酉大道の側溝としての機能を有した可能性がある。

３　耕作溝の方位と周辺の地割について

ＳＤ１・４～６が耕作溝群と推定されることは既に述べた通りである。溝は直線ではなく緩やかに蛇行している。その方位はＮ０°～15°Ｅの振れ幅を有し、平均してＮ７°Ｅ前後を指向している。ただ、年代の分かるような出土遺物はなく、遺構の前後関係も不明であった。

この耕作溝の他に、三疋田～相可地区周辺の発掘調査において、流路以外で方位が確定できる遺構が検出された例は以下のものがある。

①　相可出張遺跡②ＳＢ10（N12°Ｅ、奈良時代）

②　同上ＳＤ１（N16°Ｅ、奈良～鎌倉時代）

③　三疋田遺跡③ＳＤ10（N9°Ｅ、12世紀中葉）

①は総柱の掘立柱建物であり、倉庫の可能性が挙げられている。②は水路跡とも考えられているが、①とほぼ方位を同じくすることから、これに対応した区画溝の可能性も指摘されている。③は溝内から瓦が多量に出土したことなどから、三疋田遺跡調査区に隣接して存在した寺院の区画溝である可能性が高いと考えられている。

こうして見てみると調査事例は少なく、遺構方位の振れ幅も決して小さくはないが、全体として表層地割の方位とは一致せず、７°～16°東偏した方位の遺構が検出されていることがわかる。

こうした遺構方位と表層地割方位の不一致の理由について、当地においては現状の地割が成立する以前に東偏方位の地割が存在していたことが考えられる。こうした、表層地割成立以前に何らかの地割が存在したという事例は、これまでにも多々指摘されており④、当地でも充分にその可能性があろう。

ここで、前述の遺構方位に近似した値の方位を有する表層地割が見られる箇所を求めると、櫛田川対

第９図　九條遺跡周辺検出遺構方位図（1:12,500）

岸の阿波曽周辺で、N15°Eの地割が認められる。こちら側の地割は三疋田側ほど整然としておらず、かなりの乱れがある。これが比較的古い地割を残しているとするならば、三疋田側の表層地割成立以前には、櫛田川の両岸に阿波曽側と同一か、近い方位を有する地割が展開していた可能性もある。

ただし、三疋田周辺での発掘調査事例は少なく以上のように考えてきた場合、いつ頃に現在のような表層地割が成立したのかが問題となる。上記の発掘調査においては、表層地割と方位を同じくし、なおかつ所属時期のわかるような遺構は見出されていない。従って表層地割の成立年代についても確たることは言えない。しかし、調査地周辺で多数散布し、また範囲確認調査でも各所で検出されている、中世後～末期の南伊勢系土師器の存在は軽視すべきではなかろう。明確な遺構がないにもかかわらずこうした遺物が出土するということは、集落縁辺部にも及ぶような範囲で、大規模な土砂の移動を伴う土木工事が行われたと考えられる。こうした条件に合致する土木工事としては、特に耕地整理が考えられる。よって、三疋田周辺に展開している現状の表層地割が最終的に確定したのは、近世の耕地整理による可能性を指摘しておきたい。（萩原義彦・山本達也）

【註】

①星野利幸「神三郡の土地利用について―条里復元を中心に―」『斎宮歴史博物館研究紀要　16』斎宮歴史博物館 2007

②三重県埋蔵文化財センター『相可出張遺跡発掘調査報告』1996

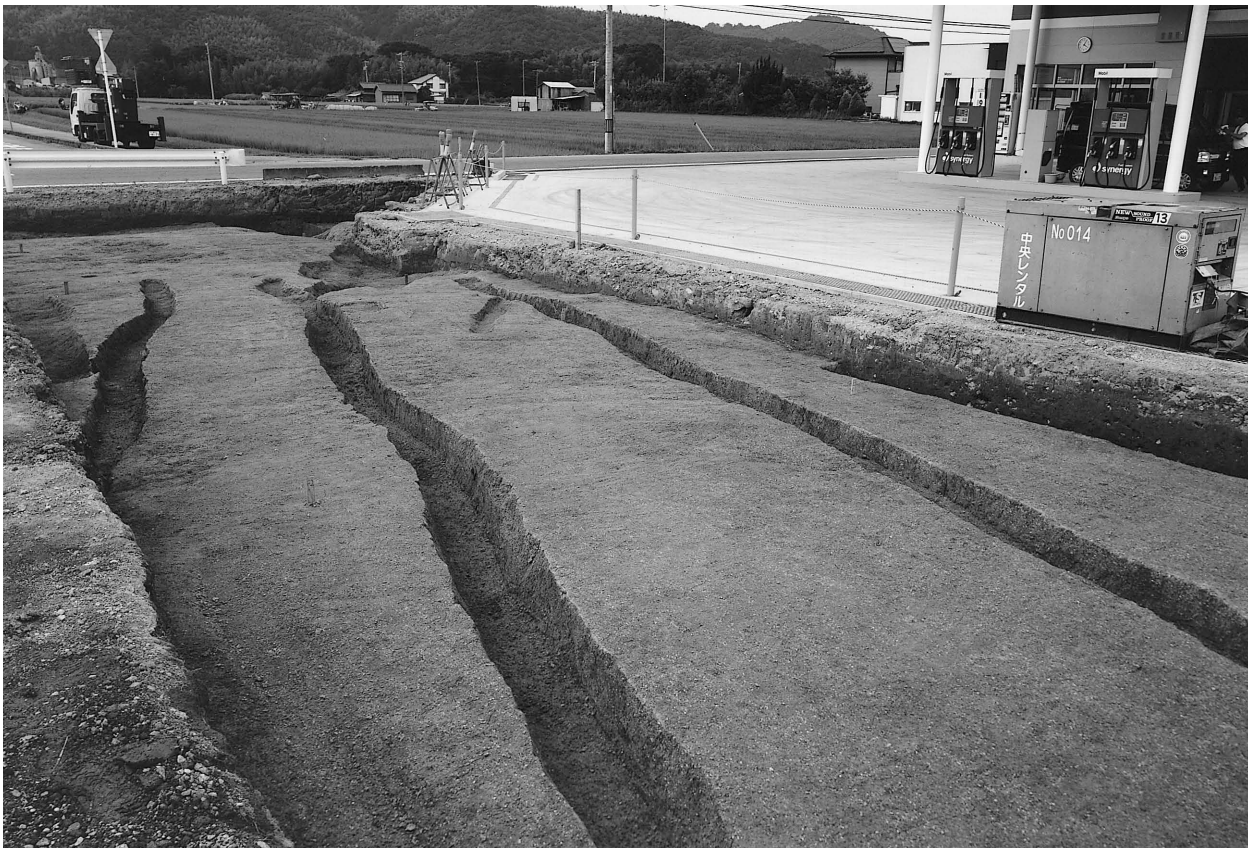
③三重県埋蔵文化財センター『三疋田遺跡発掘調査報告』2008

④倉田康夫『条里制と荘園』東京堂出版1976

調査前状況（北から）

調査前状況（南から）

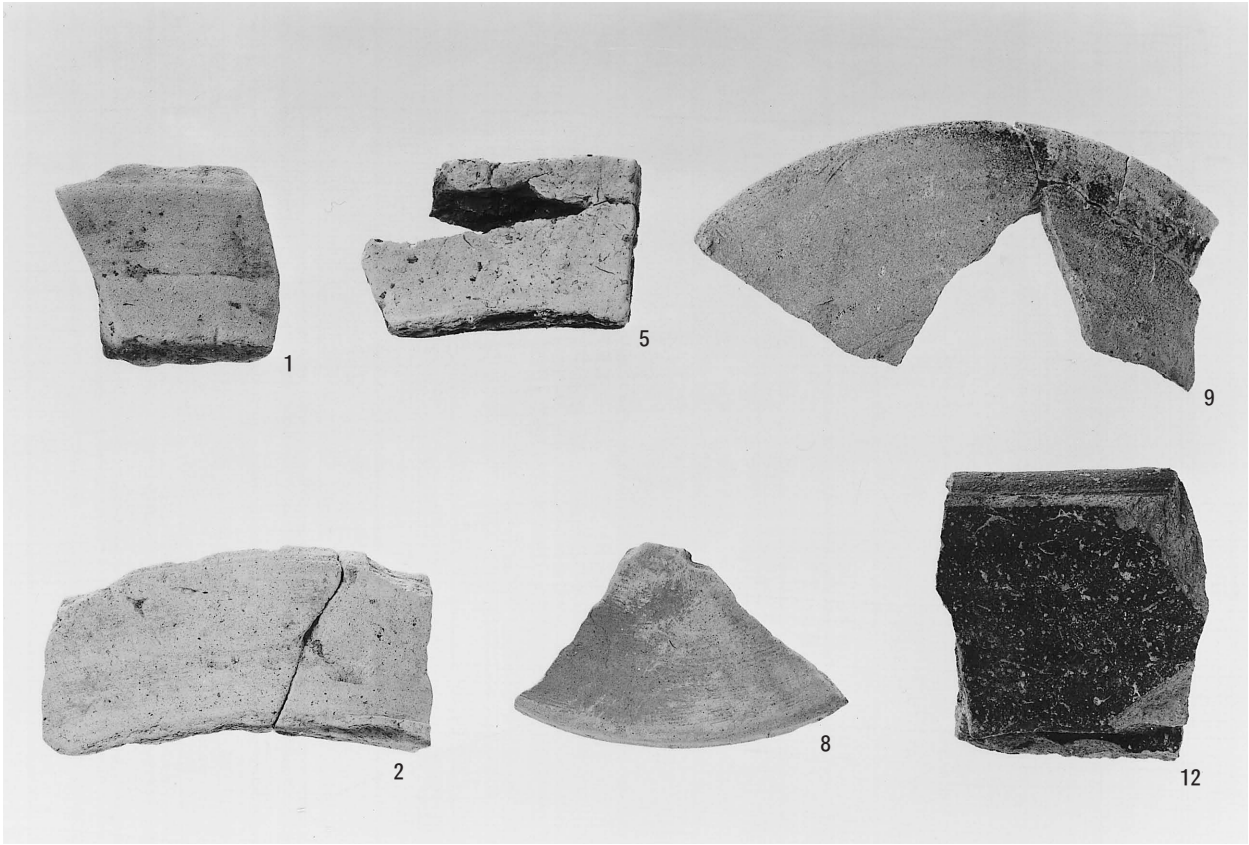
調査区完掘状況（北から）



ＳＤ１・４・５完掘状況（南から）

ＳＤ２完掘状況（北から）

調査風景（南から）



出土遺物

調査区工事後状況（北から）

報　告　書　抄　録

ふりがな	くじょういせきはっくつちょうさほうこく
書名	九條遺跡発掘調査報告
副書名	
巻次	
シリーズ名	三重県埋蔵文化財調査報告
シリーズ番号	305
編著者名	山本達也・萩原義彦
編集機関	三重県埋蔵文化財センター
所在地	〒515-0325　三重県多気郡明和町竹川503　TEL　0596(52)1732
発行年月日	西暦2009年１月30日

ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード 市町村	コード 遺跡番号	北緯	東経	調査期間	調査面積	調査原因
くじょういせき	たきぐん　たきちょう　さんびきだ　あざくじょう・かぐらでん	441	a 441	34度29分53秒	136度31分23秒	20070620～20070706	145.82㎡	平成19年度農免農道整備事業（松阪多気地区）
九條遺跡	多気郡多気町三疋田字九條・神楽田							

所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
九條遺跡	田畑跡	奈良時代～中世	溝	須恵器 陶器（常滑焼） 土師器（甕・鍋・羽釜・皿）（総出土量1.32kg、内、本調査出土量0.5kg）	

要旨

九條遺跡は、櫛田川右岸の河岸段丘上に立地する。今回報告の調査では、溝６条が検出された。溝は東西方向のものが１条、南北方向のものが５条ある。特に、東西方向のＳＤ３は道路側溝、南北方向のＳＤ１・４～６は耕作溝と考えられる。遺物は少量の土師器・須恵器が出土したのみで、参考のため併せて範囲確認調査時の出土遺物も報告した。なお、調査地は当初、三疋田遺跡の一部と考えられたため、三疋田遺跡第２次調査として現地調査を行った。しかし、範囲確認調査の結果等から新出遺跡として扱うべきであると判断し、小字名より「九條遺跡」と命名した。

三重県埋蔵文化財調査報告305

九條遺跡発掘調査報告

2009（平成21）年１月発行

編集
発行　三重県埋蔵文化財センター

印刷　光出版印刷株式会社